

教科学習外活動における アクティブ・ラーニング

—「ワールド・カフェ」の進め方と実践事例—

現在、各校では「アクティブ・ラーニング」（以下、AL）の視点からのさらなる授業改善の試みが行われている。高校におけるALが目指すものは、生徒による主体的・協働的な学びであるが、学校における全ての教育活動で主体的・協働的な学習態度を育もうとする時、教科学習外活動はどのような展開を見せるのだろうか。対話の一手法である「ワールド・カフェ」を軸に考える。

教科学習外活動で 主体的・協働的な学びの力を育む

アクティブ・ラーニング（以下、AL）では、他者との対話や協働を通して学んだ知識を構造化することが学習上のポイントとなる。そのため、各授業ではペア（グループ）ワークを効果的に取り入れ、生徒が学習内容を複眼的に捉えながら構造化していくが、同時に、対話や協働のルール、そしてこれからの社会で対話や協働が一層重要になるという「価値」の確認を行っていくことも必要だ。

「主体性を持って多様な人々と協働

して学ぶ態度」（高大接続システム改革会議「最終報告」より）が求められる中、主体的・協働的な問題発見・解決の場面を、教科学習にとどまらず、様々な教育活動で生徒に体験させることは、カリキュラム・マネジメントの観点からも今後より一層重要になる。言わば、教科学習外活動のAL化である。

進路講演会を例に考えてみる。多くの高校では、大学教授や社会人を招いた進路講演会が行われている。各校の教育目標などに照らし合わせて、講演テーマなどが選定されるが、生徒は講話を聞くだけといったケースも少なくない。普段は接する機会

の少ない学校外の人の考えや思いを知ることは重要だが、一方のインプットは、気づきや感動が生徒の中に芽生えにくいという面もある。

教科学習であれ、教科学習外であれ、他者との対話や協働は、学んだことや気づいたことを構造化するきっかけとなる。進路講演会を始めとする教科学習外活動をより主体的・協働的なものとする上で有効な対話の手法が、「ワールド・カフェ」である。

環境づくりと活動設計で 自由な対話を促進する

ワールド・カフェは、1995年

にアメリカで開発された対話の手法である（*）。お互いの意見を否定しないという安心・安全が保障された、文字通り、カフェのようなリラックした雰囲気、答えが1つとは限らない問いについて話し合う。最近では地方創生やグローバル化など、正解が決まっていないテーマ、意見が対立しやすいテーマでのワールド・カフェが、自治体やNPO主催のワークショップで頻繁に行われるようになってきている。企業でも、ワーク・ライフ・バランスやキャリア形成をテーマにしたワールド・カフェがよく行われているが、それはワールド・カフェが異なる価値観を衝突させるこ

*アメリカの組織開発学者であるアニータ・ブラウン氏、デイビッド・アイザックス氏が開発

図 ワールド・カフェの基本的な進め方

1 リラックスして対話できる環境づくりを行う

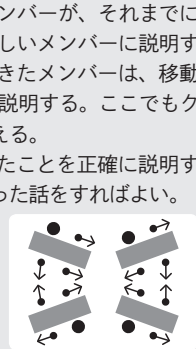
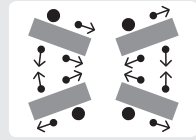
- ① 4、5人用のテーブルを作り、テーブルにクラフトペーパーをかける。テーブル上には色違いのサインペンを人数分置く。
- ② 音楽をかけたり、飲み物やお菓子を用意したりして、カフェのような雰囲気をつくる。

2 誰もが自由に対話できるようにグラドルールを説明する

- ① 「これから話し合うテーマは、正解が誰にも分からないものであり、答えが1つとも限らない。そのため、間違いも存在しない。だから、思ったことをどんどん口にしよう」
 - ② 「ほかの人が自分と違う意見を言った時は、頭ごなしに否定せず、なぜそうした意見に至ったのかを考え、自分との違いを楽しもう。固定観念や常識、今日までの自分にとらわれないことが大切だ」
 - ③ 「同じグループの人の意見を聞いて、心に残った言葉や、それをきっかけに思いついた自分の考えをサインペンでクラフトペーパーにメモしよう。文章にまとまらない時は、単語や図、絵でも構わないので、とにかくどんどんメモしよう」
- *上記のほか、以下のようなことをルールとして説明してもよい。
- ・「グループの1人が話している時は、その人の顔をしっかりと見て聞くようにしましょう」
 - ・「静かに考えることで思いがけない気づきに出合えることがある。グループに沈黙が訪れた時は、新たな発見のチャンスだと考えて、焦らずに沈黙思考を歓迎しよう」

3 グループ単位で対話を行う

- ① テーマについて、グループごとに対話を行う。テーマは正解が誰にも分からないもの、答えが1つとは限らないオープンエンドなものを選ぶ。
- ② 15分～20分経ったら、各テーブル1人のメンバーだけを残し、ほかのメンバーは別のテーブルに移動する。
- ③ 移動した後、各テーブルに残っていたメンバーが、それまでに自分のテーブルで話し合われた内容を新しいメンバーに説明する。また、ほかのテーブルから移動してきたメンバーは、移動前にいたテーブルで話し合われた内容を説明する。ここでもクラフトペーパーに気づいたことを書き加える。
*この時、前にいたテーブルで話し合われたことを正確に説明する必要はなく、あくまでも自分の心に残った話をすればよい。
- ④ 15分～20分経ったら、最初から各テーブルにいたメンバー1人だけを残して、そのほかのメンバーは再び別のテーブルに移動する。それを何回か繰り返す。
- ⑤ 全員が最初にいたテーブルに戻る。対話の旅を通して、自分が聞き出したことや、自分の中の変化・気づきを語り合う。



となく、むしろ古い価値観に縛られない新しい考え方を創出する機会になるからだ。

ワールド・カフェでは、参加者が一定時間の中でたくさんの人と話し合い、あたかも世界を旅するように見聞を広め、自分にはなかった気づきを得られるよう、独特の進め方が設定される。また、リラックスした雰囲気でも自由に話し合えるよう、環境づくりが非常に重要となる。そして、対話を始めるにあたっては、「自分と異なる意見を否定しない」「常識にとらわれることなく自由に意見を述べる」といったグラドルールの明示も大切になる(図)。

参加者が知識や経験を共有し、創造性のある対話を楽しむワールド・カフェを教科学習外活動に取り入れることで、参加者である生徒は、主体的・協働的に活動する楽しさや喜びを知ることができ、教科学習におけるALの素地を豊かにすることができるのではないだろうか。また、教師にとっても、ワールド・カフェを開催することで、教科学習をデザインする上での様々なアイデアが得られるだろう。

ダイベートと大きく異なるワールド・カフェの機能

これからの社会では、独力で解決できない課題に、他者の知識や経験からも学びながら向き合う姿勢がますます必要になると考えられる。本誌2015年10月号で大谷大教授の荒瀬克己氏は、「その過程では、意見の異なる第三者の主張に納得すれば、自分自身の考えを変えていく、ある種の勇気も求められる」と説明し、対話的精神の重要性を指摘した。

多くの生徒が体験するようになったダイベートは、競技の形で行われる論争であり、試合の中で割り当てられた自説を曲げることは「敗北」を意味する。だが、相手を尊重しつつ自身の考えを率直に出し合うワールド・カフェにおいては、自説が変容することは「成長」を意味する。社会で求められる主体性や協働性を養うALは、キャリア教育そのものであると考える教師は少なくないが、他者との対話を土壌として自身を成長させるワールド・カフェは、キャリア教育の一手法としても学校現場で運用できるのではないだろうか。

ワールド・カフェで能動的に語り合う中で、「学校」という世界の多様性に気づかせる

対話を通して他者と自己の多様性に気づかせる

長崎県立諫早高校では、2015年度より、グローバルに活躍する人材をゲストに招いた「グローバル講演会」を開催している。グローバル講演会の最大の特徴は、ワールド・カフェを始めとする対話の手法を取り入れて、生徒が語り合う時間を重視している点だ。

きっかけは15年7月、国際NGO創設者を招いた講演会を進路指導部が企画したことだ。講演会の内容を検討していく中で、「ただ講演を聞いて終わりという従来のスタイルでよいのだろうか」という課題意識が生まれてきたと、進路指導主事の後田康蔵先生は振り返る。

「本校の生徒は、日々の学習にも部活動にも全力で取り組んでいます。

しかし、毎日を忙しく過ごしている分、今の学習が将来にどうつながるのかを実感する機会は多くはありません。また、教師の言葉を素直に受け入れる半面、自分の考えを率直に相手に伝えることは、どちらかとい

えば苦手です。さらに、地方で暮らす生徒は都市部の生徒に比べて、大学や社会が必要とされる多様性を受容する力を身につけるチャンスが乏しいと感じていました」（後田先生）

「講演会を利用して、生徒がより社会の多様性を実感したり、主体的に意見を述べたりする機会をつくりたい」「これからの入試、そして社会で求められる表現力、協働する力を養う場にもしたい」と、後田先生は校長、教頭、さらに高校生を対象とした教育ワークショップを行う外部ファシリテーターと協議を開始した。その結果、講演を聞いて感じたことをワールド・カフェで生徒同士が話し合う、

「講演＋対話」のスタイルを考案。「グローバル講演会」と命名した。「グローバル」という言葉には、国境を超えて活躍するゲストを招くという意味だけでなく、同じ学校の仲間の多様性と、自分の内面にある様々な価値観、可能性に気づいてほしいという後田先生の願いも込められている。

学校の中にもグローバルがあることを知る

15年7月の「グローバル講演会」では、全校生徒の約3分の1にあたる500人が聴講。90分間のゲストの講演を聞いた生徒の中から、自ら希望したおよそ50人の生徒が120分間のワールド・カフェに参加した。

あらかじめ生徒には「講演会の後、講師の方と一緒に語り合いますよ」と告知されていたが、「ワールド・カフェ」という手法やその進め方などに関して説明は行っていなかった。そのため、実際に何人の生徒が参加を希望するのか、当日になるまで分からなかったが、「それまでの講演会にはなかつた高揚感が、多くの生徒に参加を決意させた」と、国語科の

高比良周一先生は振り返る。

「講演会のゲストが若く、親しみを感じさせる方なのに、とてもエネルギーが豊富なエピソードを語ったこと、講演会を聞いたその場で500人の生徒が感想を話し合ったことなど、生徒はいつもの講演会とは全く異なる雰囲気ショックを受けていました。ジェットコースターから降りた時のようなドキドキ感だったと思います。だから、午後の語り合いの場にも、急ぎよ部活動を休んで参加した生徒が何人もいました」（高比良先生）

ワールド・カフェでは、4、5人のグループをつくり、まず講演の感想を共有して、「グローバル社会」に対するイメージを広げていった。その後、「10年後、世界を今より少しでも



長崎県立諫早高校
教職歴17年。同校に赴任して8年目。国語科担当。



長崎県立諫早高校
教職歴20年。同校に赴任して5年目。進路指導主事、物理担当。

幸せにするために、私たちには何ができるか」というテーマでメンバーを変えながら対話を行った。あえて抽象的なテーマ、答えが1つではないことが明らかな問いにしたのは、どの生徒にとっても話しやすい場をつくろうというねらいからだ。

「ワールド・カフェでは、気になっていたけれどよく分からない、話しやすいけれど実際に話し始めると予想以上に話が広がるテーマがよいと思います。社会問題などについて

長崎県立諫早高校・3年生
末永翔太
すえなが・しょうた

長崎県立諫早高校・3年生
田崎颯大
たさき・そうだい

長崎県立諫早高校・3年生
豊福勇樹
とよふく・ゆうき

長崎県立諫早高校・3年生
橋本真依
はしもと・まゐ

長崎県立諫早高校・2年生
小川晴香
おがわ・はるか

第1回 グローバル講演会

国際 NGO 創設者による 90 分の講演を聞いた後、希望者が別室でワールド・カフェに参加した。高校時代に社会貢献への志が生まれたというゲストの体験を聞き、「世界の一員である自分」について考えるのが目的だ。



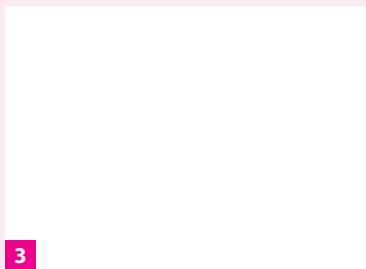
1

ゲストの講演を聞く生徒たち。インプットに徹する静かな時間も、これまでの講演会同様に確保した。



2

通常の講演会はゲストの講演と質疑応答という構成だが、グローバル講演会では、講演を聞いた後、全生徒が短時間ながら語り合った。



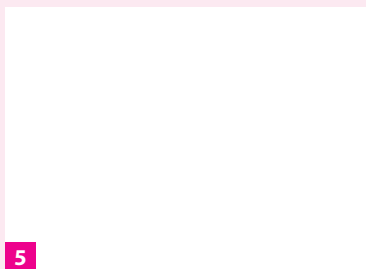
3

講演後のワールド・カフェには、ゲスト、そして教師も参加。普段は出会えない「グローバル人材」と対話を重ねていった。



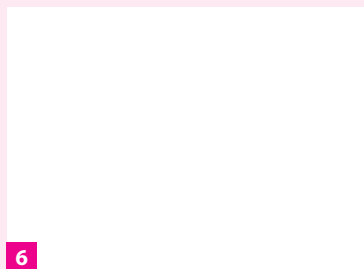
4

対話を重ねることで、生徒の内に「言いたいこと」が積み重なる。その結果、生徒は公開討論にも自ら手を挙げて参加した。



5

ワールド・カフェの最後には、「これからやってみたいこと」をグループ内で発表し、今後の高校生活での具体的な行動につなげていった。



6

ワールド・カフェの後も生徒はその場に残り、ゲストと対話を続けた。リラックスした様子で対話を楽しむ生徒の様子が印象的だった。

知識の量や論理的な思考力の有無にあまり左右されず、ほかの人はどのように考えているのかを素直に聞いてみたくなるような問いを立てることが重要です」(後田先生)

ワールド・カフェに初めて参加した生徒たちは、「同じ学校の生徒が実はいろいろな考えを持っていること」に一様に驚いたという。

「テーブルを移動して、話すメンバーを変えらるうちに、一つひとつのテーブルが国のように思えてきて、まるで世界を旅行しているような感覚になっていきました。同じ学校の中でも自分とは違う考えを持っている人がたくさんいて、小さな場所でも、人が集まればグローバルなのだと思います」(橋本さん)

「ワールド・カフェに参加して、自分はこのな話せるんだと分かって、びっくりしました。最初はすごく緊張したけれど、会場は音楽が流れて全く堅い雰囲気ではなかったの、だんだんみんな笑顔になって、時間の経過とともにどんどん話せるようになりました。120分間はあっという間だったけれど、もつと長い時

第2回、第3回 グローバル講演会

グローバルに活躍するビジネスパーソン、発展途上国で活動してきた国際 NGO 創設者の講演を聞き、ワールド・カフェを行った。



1

講演後の質疑応答もゲストと横並びの対話形式で実施。いつもとは違う会場の雰囲気だからこそ、生徒の集中力も高まる。



2

話すのが苦手な生徒もいるため、「傾聴から新たな発見が生まれることもある」と、沈黙の価値を事前に説明することも重要。



3

「グローバル時代の教育」をテーマに、教師による即興の公開討論も実施。筋書きなしの議論に生徒は耳を傾ける。



4

話し合った内容を書いたクラフトペーパーは、校内の廊下に掲示。参加できなかった生徒の興味の喚起へとつなげる。

生徒の主體的な対話力を引き出すワールド・カフェ

同校のワールド・カフェには、希望した教師も参加し、生徒との対話を楽しんだ。後田先生もワールド・カフェに参加したが、「生徒との対話

間語り合っただと思えるくらい、自分の考えを深められました」（小川さん）

は教師にとっても新鮮な体験だった」と振り返る。

「ワールド・カフェでは、教師も生徒も同じ一参加者であり、どちらの意見も価値は同じです。いつもは教え、導く立場なのに、この時は同じ立場で話をするのですから、最初はとてもドキドキしましたし、『教師として生徒の視野を広げようという意見を出したい』という気持ちもありま

した。しかし、対話が始まって20分が経つ頃には、『生徒はここまで話せるんだ』『この子たちはすごい！』と、自分の気持ちが大きく変わっていることに気づきました。実際、生徒の言葉から教わることもたくさんあり、120分のワールド・カフェで自身の生徒観が大きく変わりました」（後田先生）

「ワールド・カフェでは、生徒はいつもは話さないような本音をどんどん口にするようになりました。生徒の言葉を聞くうちに、『私も本音を言わなければいけない！』と思うようになったのです」（高比良先生）

とは言え、全ての生徒がスムーズに対話を楽しめたわけではない。

「みんなたくさん話しているのに、自分はあまり話すことができませんでした。みんながいろいろなことを考えていて、知識も豊富だと分かって、ワールド・カフェの後は正直、少し焦りを感じました。でも、自己嫌悪になることはありませんでした。大学や社会に出たらきつとこのような力が必要なのだろうと分かりましたし、これからもこういった機会があれば、どんどん参加しようと思

生徒が企画・運営に参加し、活動はより能動的に発展

第1回・第2回グローバル講演会の企画と進行は、進路指導部と外部ファシリテーターが行ったが、第3回は、ワールド・カフェの面白さに感銘を受けた生徒数名がゲストの人选や登壇依頼、ワールド・カフェの進行などに携わることになった。有志の生徒と進路指導部、外部ファシリテーターは、「グローバル化において、本校の生徒はどのような課題を抱えているか」「生徒にどんな刺激を与え、変化をもたらしたいか」などについて検討し、ワークショップのテーマやプログラムを決めていった。

「自校の生徒像」と「講演会で与えたい変化」を話し合う生徒。ゲストに何を話してほしいのか、その理由とともに文書にまとめ、ゲストに伝えた。



第3回グローバル講演会当日の朝、講演会やワールド・カフェの進行について最終確認をする生徒と教師。

ました」(豊福さん)

120分間のワールドカフェの途中には、「諫早高校は世界を幸せにする人材を育てることができているのか」というテーマで公開討論も実施。50人以上の参加者の前にもかかわらず、何人もの生徒が「自分に意見を言わせてほしい」と自ら手を挙げ、討論のテーブルに着いた。

ワールド・カフェを主体とした生徒との対話の場を体験した教師たちは、「本校の生徒の潜在能力の高さに驚いた」「生徒は自分の意見を語れないのではなく、我々がそうした場を与えてこなかったのだ」といった感想を口にした。

「生徒はここまでやれるのだと分かったことで、自分の授業観、生徒観にも変化が起きました。私も授業でAIを行っています。意に反して従来の教え込み型に戻ってしまいう時もありました。しかし、ワールド・カフェを通して、『生徒主体』とは何かを改めて考えたことで、教科学習におけるファシリテーターとしての役割を強く意識するようになりました」(後田先生)

多様性を受け入れることで 生徒の学び方が豊かになる

15年12月、16年3月にもグローバル講演会を実施し、ワールド・カフェを行った同校。教科学習外活動において対話の場を学校内に意図的につくることで、教科学習にも必要とされる多様性を受け入れる力が生徒に身についたようだ。

「一人ひとりがいろいろな考えを持って生活していることが分かり、ワールド・カフェ以外の場面でも、その人がどのような考えを持っているのか、じっくりと聞いてみたいと

いう気持ちが強くなったと思います。友人とも今までなら話さなかったような深い話をするようになりましたし、親と話す時間も以前よりも増えたと思います」(田崎さん)

「ニュース一つ取っても、ほかの人がどう考えているのかなど、多面的に捉える習慣が身につきました。自分の考えにこだわりすぎずに、ほかの人の意見も取り入れて、新たな自分の考えをつくることができるようになってきたと思います」(末永さん)

高比良先生は国語の授業でワールド・カフェを取り入れた。評論の筆者の主張を足がかりに、高比良先生

「問い」と「答え」を 生徒自らが生み出す場をつくる

「グローバル社会を生きる力」「未来の理想の田舎」「大人と子どもの境界線」。これまで様々なテーマで中学生や高校生とワールド・カフェを行いました。普通の中高生が大人をハッとさせる、哲学者のような言葉を口にするのは、ワールド・カフェで他者の価値観に触れながら、テーマをその時の自分に引きつけ、自分なりの「問い」と「答え」を生み出しているからです。そのため、ワールド・カフェの後の参加者の感想、気づきは実に多様です。

ワールド・カフェに興味を持った先生には、一度ご自身が参加者としてワールド・カフェを楽しんでみることをお勧めします。ファシリテーターのどんな言葉、所作が安心・安全な空間をつくり、対話を促進させ、個々の思考を深めるかが体験的に分かるはず。それは、校内における主体的・協働的な学びの場づくりとプログラム作成において大いに役立つと思います。

「グローバル講演会」の企画・運営に参加した
外部ファシリテーター
「三四郎の学校」事務局長 日賀優一

が設定した問いについてクラスで話し合うことで、生徒はよりクリティカルに筆者と向き合うことができるようになったという。授業を受けた生徒も、「ワールド・カフェで人は意見が違って当然だと分かってから、筆者は何をを考えているのかと興味を持って評論を読めるようになった」と教科学習との密接な関連性を語る。

「いろいろな教科で、ワールド・カフェなどの対話の手法を取り入れ始めるなど、教科学習での新たな引き出しが確実に増えました。公民と国語で合同で授業づくりに取り組むなど、合教科型の授業デザインも進んでいます。教科と教科、教科と行事・部活動など、学校の全ての活動が対話を軸に結びついていくことで、それぞれが従来にはない価値を生み出せばよいですね」(後田先生)

ワールド・カフェで他者の価値観に接することで、生徒も教師も自分の中の常識や殻を破るエネルギーを得る。自分という国から一歩を踏み出し、新たな世界に出て行くワールド・カフェは、学校にとっては学びをグローバルにするための有効な手法と言えるのではないだろうか。